

○夏期高温な気象条件に適応した新品種の育成と連作障害対策が課題。平成12年に「早生1号」、平成23年に「早生2号」と「中生」を育成し、苗供給体制も整備。平成29年からはピンク花色のメリクロン苗の供給を開始予定。**新品種「おかやまオリジナルリンドウ」の普及拡大**を目指す。

○普及指導センターが中心となり、研究所や行政等と連携して実証ほ設置による**新品種栽培技術や連作障害対策技術の確立**と**栽培面積の拡大**を図る。

○りんどうの販売金額目標を**1億円(H30)**とする。

具体的な成果

1. 新品種栽培技術の確立と普及

- 実証ほを活用した現地検討会を開催
- 栽培啓発資料を作成
- 「新技術セミナー」開催による技術普及（新品種面積 H25 1.5ha→H28 2.7ha）
- ピンク花色のメリクロン苗の栽培実証を開始（H29～）

2. 連作障害対策技術の確立

- 樹皮を活用した栽培の普及。（コンテナ栽培面積H28 83a）



コンテナ栽培

3. 販促活動の強化

- 生産者、関係団体が主体の販促活動
- 市場からは需要期向け品種として評価（生産額 H27: 82百万円）

目標を達成するための普及活動

平成26年度

- 普及指導センター、革新支援センター、研究所等で「おかやまオリジナルリンドウ技術支援チーム」設立
- 新品種栽培技術の検討および栽培啓発資料作成

平成26～29年度

- 新品種の安定生産技術の確立と普及実証ほや展示ほの設置
現地検討会・研究会の開催
- コンテナ栽培技術など連作障害対策技術の確立と普及
実証ほの設置
地域版技術マニュアルの作成

平成26～30年度

- 新品種を「おかやま夢りんどう」として販促活動支援
生産者と流通業者の意見交換会等
- 平成29年度～30年度
■ピンク花色のメリクロン苗実用化
展示ほの設置

関係機関との連携

- ・革新支援専門員は、実証ほの設置場所や内容等が、設置効果を十分に発揮できるように普及指導員を指導・助言。
- ・研究機関や行政、関係団体等の連携・調整は革新支援専門員が実施。

今回の普及活動の特徴

革新支援専門員の立場で、地域の広域的な課題を設定し、各普及指導センターの取組の進捗管理を実施。

おかやまオリジナルリンドウの普及

活動期間：平成24～30年度

1. 取組の背景

岡山県では県北部を中心に昭和40年代からりンドウの生産が行われており、西日本では最大規模の産地であるが、夏期高温な気象条件に適応した品種が少ないことや連作障害対策が課題となっていた。

平成23年には農業研究所が「早生2号」と「中生」を実用化した。「早生2号」は8月、「中生」は9月の需要期向けの品種で、年による開花期の変動が小さく、りンドウ産地としてはやや気温が高い岡山県に適する。

また、市販のピンク花色品種が少なく、入手も難しいことから、平成29年からメリクロン苗による「中生ピンク1号」の実証栽培を始めた。

りンドウは連作を嫌う品目のため、同じほ場で連作すると連作障害により、生産性の低下や欠株の増加と行った問題が生じる。そこで、同じほ場で栽培を継続する方法として、桧や杉の粉碎樹皮をコンテナに充填して培地とする「コンテナ栽培」の実用化を図った。

2. 活動内容（詳細）

平成26年度には普及指導センター、革新支援センター、研究所等で「おかやまオリジナルリンドウ技術支援チーム」を設立し、県内のりンドウ生産者で構成する「りンドウ研究会」等を対象に、オリジナルリンドウの安定生産技術の現地講習を行うとともに、生産者間の情報交換の場を設けた。

栽培啓発資料として栽培特性や、同品種を導入した生産者の評価を記載した「おかやま夢りンドウ早生2号ー作ってみませんか」を作成・配布した。

りンドウの安定生産を図るため、高畝とすることや粉碎樹皮を土壌混和する実証ほを設置し、効果を確認した。

コンテナ栽培技術の実証を行い、慣行栽培とほぼ同等の切り花が得られることを示した。自動かん水設備が必要なことなど、慣行栽培に比べて経費を要するが、生産者の高い関心を集めた。ただし、本技術は粉碎樹皮という特殊な培地で栽培するため、慣行栽培より細やかな管理が必要である。

平成29年に、「中生ピンク1号」の現地実証を始めた。県オリジナル品種の培養苗供給は初めての試みであり、今後経済性の評価を行っていく。

生産者と市場関係者は年数回意見交換を行っており、生産者と花き商との意見交換会も複数回実施した。市場関係者からは県オリジナル品種に対し、品質面でやや不満の声もあるが、需要期出荷できる品種として概ね高く評価されている。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 新品种の普及

新品种の栽培面積は平成25年の1.5haが、平成28年には2.7haに拡大した。特に、「早生2号」は強健で8月の需要期に出荷できる品種という

ことが生産者に評価され、この時期の主力品種として定着している。

(2) コンテナ栽培

連作障害対策として取り組んだコンテナ栽培は、急速に導入する生産者が増加し、平成28年度には83aまで拡大した。

4. 農家等からの評価・コメント

T氏：「早生2号」は下枝がたくさん出るが、3年生以降はそれほど気にならない。強健で、切り花本数も多く生産性は高い。

M氏：「早生2号」は十分草丈を確保できるので、株養成に気を配る必要がない。栽培しやすく、需要期に出荷できるのも良い。

H氏：「早生2号」は需要期に出荷できる。株が強いので初心者にはこの品種を勧めている。

5. 普及指導員のコメント（普及推進課 副参事 粒生直義）

「早生2号」は草勢が強いため欠株が少なく、生産性が高い。需要期の出荷率が高いのも利点。花段数が多いが、需要期向け品種はあまり花段数の多さが評価されず、頂花の開花がやや遅れる点も惜しまれる。栽培技術で解決できないか検討が必要。

6. 現状・今後の展開等

農業研究所に、需要期に求められるM規格が多く得られるよう、「早生2号」の栽培管理技術の改善の検討を求めている。平成30年から予備試験の予定。

「中生ピンク1号」は研究所以外で栽培経験がないため、平成29年、30年に現地栽培実証を行う。